

ふたつの大師様を見歩く旅

平成 24 年 2 月、西新井に住んでいる友人を訪ねることになり、ついでに大師様を拝む機会を得た。西新井大師参拝が実現したら、川崎大師にも行ってみたいと言う気になってきた。何とか年内に達成したいと思い 12 月末になってから急遽出かけて見た。双方とも弘法大師（空海）の開祖による真言宗の寺で、東京周辺にいくつか存在する大師様の中でも両巨頭とも言える。ふたつの寺を覗いて見るふたつの旅が実現した。

その① 西新井大師

2 月 2 日、少々寒いが天気が良くて気持ちの良い青空。押上で京成押上線から東武線（半蔵門線）に乗り換えることができるのでこの方面へは大変行きやすくなった。半蔵門線のホームを出入りする電車の行き先表示は、北行は南栗橋行や東武動物公園行、南行は長津田行が多い。

曳舟・玉ノ井（今は東向島と改称）・鐘ヶ淵・堀切・牛田、駅の名前とクネクネと曲がりながら走る線路の両側に並ぶ家々の眺めが好きだった。今では、地下化や高架化が進んでしまい、景観に多少の変化があるが、川のそばの歴史と人々の生活の匂いと感じられる味のある車窓であることは今でも変わらないように思う。どこやらの新幹線の駅のように立派になってしまった北千住、ここで乗客は入れ替わる。

北千住を出てしばらくで荒川を渡ると小菅、右手に見える東京拘置所は今ではリゾートマンションを思わせる佇まいだ。左に大きくカーブしながら常磐線を跨ぐと五反野、名前から想像すると昔の景色が思い浮かぶ。昭和 24 年に下山事件という歴史に残る大事件があった。大人になってからこの事件の謎を解く書物をいくつか読んだことがあり、その中で五反野と言う地名を覚えた。被害者である国鉄の下山総裁が轢死体となって発見される前に、足取りが途絶えた地点が五反野だと書かれていた。

電車は北西に針路をとり日光街道を跨ぐと梅島駅に入る。さらに北西に進んで、環状七号線（環七：カンナナ）に接する所に西新井駅がある。西新井駅で、一番端のホームから出る大師線に乗り換える。

大師線は本線から離れて、環七とほぼ並行して西に向かって走る。と言ってもこの間には駅は何もない。

つまり次の駅が終点の大師前駅だ。駅舎内の案内表示に従って外へ出て見ると、大きな寺社がある門前とも思えないひっそりとした路地裏のような所に出た。路地の左手は住宅街、右手には何やら寺社の一部を感じさせる建造物が建っている。

しばらく進むと立派な山門が現れた。山門の左を見るとまっすぐな参道があり本堂に繋がっている。何と表から参道を通ることなく横道から入ってしまったということだ。山門をくぐると塩地藏、その先には六角観音堂、そしてその先に本堂が構えている。本堂の前には大きな舞台が築かれており少々目ざわりな景色だし、しかも本堂に上がる階段の半分以上が占領されている。傍らの看板がその疑問に答えてくれた、「明日は節分、豆まきの準備」ということだった。創建は天長 3 年（826 年）、正式な名称は「五智山遍照院總持寺」と言う。本堂は江戸時代に建てられたが、昭和 41 年に火災で焼失し昭和 47 年再建されたものらしい。おそらく鉄筋コンクリート作りだろう、「硬さ」と「冷たさ」が感じられる。本尊は十一面観音菩薩、火災で消失を免れることができたことと示されていた。さらに説明を見ると、このお寺は真言宗豊山派に属する寺で、総本山は長谷寺で大本山は護国寺ということまでわかった。

その昔、本堂の西側で弘法大師が加持祈禱をしたところ水が湧き出たとの伝承から西新井大師の名が生まれ、江戸時代にはかなり大きな門前町だったらしい。近代に入って、このあたりは南足立郡西新井村と呼ばれ



ていたが昭和7年に東京市に組み入れられたようだ。

節分には豆まきのほかにだるま供養も行われるようで、集めただるまが山のように積まれているのが見えた。

池の縁を周って如意輪堂、権現堂、奥の院を巡って山門に戻った。山門をくぐり、参道を歩いて大師様を出たが、参道から振り返って見ると山門の構えが意外に立派に見えるので驚いた。どこもかしこも節分の準備で、テキヤのお店が开店準備を進めていた。



その② 川崎大師

西新井大師詣りから10カ月余が経過した。正月と正月明けには混雑するので年内に行っておこうと思い12月20日、川崎大師への旅を決意。

これまた我が家からは交通の便が良い。京成成田線は都営地下鉄・京浜急行と相互乗り入れしているので便利ではあるが、最近成田空港と羽田空港への利便性に偏重の傾向があり、これ以外の場所へ行くのにはやや不便になった。八千代台から西馬込行に乗り、新聞を読み眠りを楽しみながら旅がスタートした。

泉岳寺で京浜急行の快速特急三崎口行に乗り換え、品川駅を出ると俄にスピードが上がり、すぐに多摩川を渡って川崎に着いた。

高架の京急川崎駅は階段を下りると下にもうひとつホームがある。大師線の小島新田行が待っていてくれた。大師線は川崎駅を出ると多摩川に向かって走り、ゆっくりと右にカーブしながら六郷橋をくぐって川沿いに東へ向かう。港町(みなとちょう)までは中位のサイズのマンションや一戸建てが混じる住宅地だが、港町を過ぎるとにわか「京浜工業地帯」の様相を呈してくる。左の窓には味の素を中心とした大きな建物、右の車窓には住宅地が並ぶ。河口で蛇行する多摩川は鈴木町(すずきちょう)を出ると北寄りに離れて行って



しまう。その代わりに国道409号線がじわじわと近付いてきて、川崎大師駅になる。

駅舎と国道の間に辛うじて駅前広場のようなものがある。初詣等の時にはここが人で一杯になるようだ。

国道の向こう側に参道を示す表示があり、厄除門と書かれた立派な山門が待ち構えていた。門をくぐってしばらくの間はくず餅屋(久寿餅という表記が多い)を中心に参道

の土産物屋らしい店が並んでいたが、やがて店は左側だけになり、右側に大師様の腰の高い塀が現れた。塀に沿ってしばらく進み右折を続けると両側にお店が並ぶ参道が現れ、その奥に大山門が見えてきた。やはり参道から入って左右のお店を覗きながら門に近づかないと気分の盛り上がり欠ける。



大山門には「魚がし」と書いた大きな提灯が下がっていて、その向こうにある献香所の煙りの向こうに大本堂がどっかりと座っているのが見える。大山門も大本堂も鉄骨とコンクリートの硬骨な造りで、安定感はあるが人情味が乏しく感じる。

寺の正式な名前は、金剛山金乗院平間寺と言う。真言宗智山派大本山と書いてある。智山派の総本山は智積院で、他に大本山としては高尾山薬王院・成田山新勝寺などがあるようだ。



寺の創建は1128年、無実の罪で生国の尾張を追われた平間兼豊・兼乗の親子が諸国流浪の後この地に流れ着いた。兼乗は仏法に帰依し、特に弘法大師を崇めていた。42歳の厄年に厄除け祈願を続けていたところ夢枕に高僧が立ち、「その昔海に投じた仏像を引き上げて供養せよ」と言う。仰せに従って供養を続ける折から、高野山の尊賢上人がこの地に立ち寄り、この経緯を聴いて感動し、ともに寺を建てたのが起源だそうだ。今の本堂は昭和39年に落慶、ご本尊厄除弘法大師を中心に不動明王、愛染明王などが奉られている。

八角五重塔が逆光に黒々としたシルエットを見せていて影絵のような美しさだったが、裏へ回ったらけばけばしい色が目立ち興ざめな感じがした。中書院、稲荷堂、不動堂、鐘楼とぐるっと回ると木造の不動門に出た。屋根の一部にあたる日差しに鳩が集まって温もりを得ていたが、鳩は木造ゆえの温もりを承知していたのかもしれない。五重塔の裏側に「薬師殿」と書いた矢印があったので行ってみたら、金ピカのけばけばしい建物が見えたのですぐに退散。初詣にそなえて「破魔矢」と書いた仮小屋や、臨時のトイレの設営など、寺の中のあらゆるところで準備が進められており、年の瀬を肌で感じる。参道のお店を冷やかしながらぶらぶら歩いて川崎大師駅に戻った。このまま帰っては勿体ない。初めて乗った大師線、折角だから終点の小島新田まで行ってみることにした。



殆どの客が上りホームに入っていくが、私だけが下りホームへ。

小島新田行の電車は住宅地の中を走り、次の駅は東門前（ひがしもんぜん）、その名の通り大師様の東側の門前である。ここからは住宅地は進行方向右側（南）だけになり、左側には顕著な建物が見えなくなる。産業道路駅の駅前はまだ産業道路とその大師 JCT（大師出入口）、そしてその向こう側は多摩川。電車は J R川崎貨物駅のフェンスに突きあたって、止むを得ないような形で終点になる。終点の駅らしく線



路には車止めが付いていた。国道の架橋の上に上がって見下ろすと、光る何本ものレールが走り美しい模様を描いているのが見えた。しかし、遠景には湾岸の化学プラントと思われる煙突からあがる白い煙、鼻をつき喉を刺激する何とも不安になるようなケミカルな匂い。ここに暮らしている方々には大変失礼な話であるが、長居はしたくない感じがして駅へ戻った。

以上



<Appendix> 西新井大師・川崎大師比較表

	西新井大師	川崎大師
宗派	真言宗豊山派	真言宗智山派
総本山	長谷寺	智積院
大本山	護国寺	大本山川崎大師
寺号	五智山遍照院總持寺	金剛山金乗院平間寺
創建	826年	1128年
ご本尊	十一面観音像	厄除弘法大師像
最寄駅	東武大師線 大師前駅	京急大師線 川崎大師駅
その他	駐車場なし	駐車場あり (自動車交通安全祈祷あり)